296-1970・2

定価一部100円
第296号　昭和45年2月10日発行（毎月10日発行）

昭和45年（1970年）
2月号（No. 296）
社団法人 日本山岳会
（J. A. C.）

目　次

本文
エベレスト東南稜と南壁登攀の可能性……大塚　博美… 1
エベレスト越冬隊報告…… 2
新・釜蘭土雑記…… 3
永年会員の弁……藤島　敏男… 3
南会津，三ッ岩岳……藤島　玄… 4
富山ヒマラヤ隊帰国御挨拶…… 4
国際アルピニスト集会…… 5
日本の山の印象記…… 6
図書紹介
わが雪と氷の回想……山崎　安治… 7
図書室便り
新刊図書受入報告…… 7
定期刊行物受入報告…… 7
洋書受入報告…… 7
会務報告
12月緊急理事評議員会…… 8
1月理事評議員会…… 8
第10回登山技術講習会…… 8
新入会員…… 9
ルーム日誌……10
会員異動……10
69年度忘年会……10
その他
梶本徳次郎氏逝く…… 8
エベレスト登山隊行動予定…… 2
エベレスト隊報道隊員紹介…… 2
エ峰先発隊出発…… 1
あとがき……10

エベレスト東南稜と南壁登攀の可能性

登攀隊長　大塚博美

「こんどの南壁の見込みはどうですか、サウスコルからは間違いなく登れるんでしょう……」。これはジャーナリズムに限らず、殆んどの人の関心事らしく、共通した質問であった。

一九五三年、英国が、積年の願望を果して登頂以来、エベレストのベールはぬぎとられ、失望と同時に、ぐっと身近に感ぜられるようになった。続いてスイス、米国、インドが同じルートから続々と、はた目には何か軽々と登っているように見え、サウスコルからのルートは、すでにノーマル・ルートとさえいわれるようになった。

果してそうであろうか。私は否といたい。八八四八mの高さそのものはすでに人類の経験するものであるが、その高さの持つ困難さ、危険性というものはいささかも減じていないし、気象条件を考えると、八五〇〇mに人間が寝て、八八四八mに達するということは、登山の行為の中では、最大級の困難な術であることは間違いない。生身の人間が、そのままで大高所に登る以上、これらの苦闘は当然のことであろうし、これを軽減する器具や装備などの点について見ても、人間の忍耐ぎりぎりのところまでしか助けてくれないのが現実である。

しかし、それでもあの頂きに立って見たいという変り者が三十名決ったわけである。無事に成功するなどという甘い保証などエベレストはわれわれにしてくれない。JACは打って一丸となって、経験と智慧を生かし、冷厳な自然の法則をたくみに乗切る以外にない。

事実、われわれの計画の第一の目標は、南壁―正確には南西面―の登攀にあり、一方サウスコルからの東南稜経由で登頂したパーティをサポートするという、内容から見ても実に、エベレストを二回登るという莫大なものになるわけである。しかも、南壁には極めて困難な岩壁が八〇〇〇m以上に控えており、人間の肉体がすい退し、自由が効かなくなるところから、岩登りが始まるので、これは登山計画、運行、隊員健康管理などすべがうまく組立てられた上で、スムーズに運ぶ必要がある。

第二次偵察隊は八〇〇〇mまで達し、目的を達した。本隊は残された八四八mの未知の壁を登るわけであるが、八〇〇〇mから始まる中央岩壁、これは殆んど垂直で、一番高差のあるところが中央部で四〇〇m、低いところが二〇〇mで西寄り―V字の雪渓の左側である―になっており、私は、この垂直の壁の一番短いところを抜けるのがよいと思っている。

さて、抜け切ると六十度の傾斜のイエローバンドだ。第二次の小西隊員の話しによると△堅い黄色い岩の地帯▽を南峯方向に向かって斜上行し八五〇〇m付近に最終キャンプを設ける。そこから二名の登頂隊員が、東南稜からのサポートを受けながら、フリークライミングで頂上に抜けるのであるが、どのルートをとるかは未だ決めていない。何れにしても、南壁ルートの問題点は、八〇〇〇mからの垂直の壁のルート工作と荷上げ、これに当る隊員のコンディション。さらに八五〇〇mの最終キャンプへのルート工作とキャンプ設営。この二つのキーポイントが解決して初めて登頂態勢がとれるわけであるが、そこまでに押し上げるには、なおいくつかのヤマ場がある。つまり、総量三十トンの荷物のうちCI以上で必要な大半の荷物の荷上げ。これはすでに基本計画第四案として、最低必要な荷上運行に必要な人員と量の把握は出来ているが、ABC六五〇〇mからは、サウスコル、南壁と二隊に分れ同時に荷上げが行われる。サウスコル、中央岩壁下部は共に八〇〇〇mの標高である。そして天候の状態がよければ、五月の早い時期にサウスコルを経て登頂を試みる予定である。

隊員の高度順化と健康管理はヒマラヤ登山にはいつもついて廻る問題であるが、三十名の大部隊となると、これらの管理運営も大変である。

まだまだ土俵に上る前の問題として輸送がある。一月二十五日、カルカッタに入港する三井OSKの日光山丸の三十トンの荷物を、無事にBC、五五〇〇mまで輸送するのは並大抵ではない。カルカッタの通関、さらにカトマンズへのトラック輸送。そこからルクラまでの空輸またはキャラバン。ルクラからBCまでのキャラバンと、三月二十日、BC集結の期日までにこれは完了しなければならない。これには一月二十二日に先発する五名と、越冬の二名が当る予定にしている。

最後に、南壁のむずかしさ、天候の問題と同様に重要と思うのは、チームワーク、人の側のことである。これは松方隊長を中心に、これをたすける年配者が心を配らねばならぬことであるが、三十名の大部隊ともなれば、これは見当もつかないというのがいつわらぬ心情である。過日（一月十、十一日）富士山で総合訓練を行なって顔合せをしたが、いいムードで旨く行ったと思っている。しかしこれなど僅か二日間であるしすべてこういう具合には行かぬであろうが、心配したらキリがないということであろう。

三千名の会員の中の三十人。これは実に幸せなめぐりあわせだと思う。多くの会員の支援と文部省を初め後援各社と、産業科学陣の協力。そして募金に応じてくれた個人、法人関係社など。僅か二名の者が頂に至るまでには、巾広い底辺と層の厚い支援と好意のつみ重ねによってである。

もう出発までに旬日も残さず、準備に追われ時間と勝負している毎日であるが、計画のここに至った経緯をふり返り、そして目ざす山の大きさを静かに思い、常日頃叱声鞭撻してくれた先輩、同僚、友人、特に隊員候補として埃にまみれ、徹夜までして梱包を手伝ってくれた行けなかった仲間達に深く感謝したい。そして全員元気に心おきなく動き廻って、無事に帰国したいと念願している。

先発隊出発　エベレスト先発隊田村宏明、織織英夫、成田潔思、神山義明、鹿野勝彦の五名は一月二十二日午後零時半羽田発のインド航空機で出発した。

エベレスト越冬隊報告

植村直己
井上治郎

〔その一〕

私達二名は十二月一日、越冬地に飛びました。そして井上君はペリジェ、私はクムジュンのペンバ・テンジンの家に入って家族と一緒に生活しております。クムジュンに入って、半月以上たちますが、今やっと落ちついた感じのする今日この頃です。こちらクーンブ地方は、すでに十二月の中ばをすぎているというのに、まだ日本の秋のような小春日和のいい天気が続いて、クムジュンからは毎日タムセルクを対岸に、そしてアマダブラム、ローツェ、ヌプツェ、エベレストの頭がみられます。クムジュンからペリジェまで、キャラバンで二日でいけます。先日、十二日十六日、十七日と途中パンボチェでクレバスに使う橋用の丸太四十本を買ってペリジェによってきました。

井上君の方は本格的に観測を始めていました。

私の今回の越冬中の目的の一つであるシェルパのトレーニングは、シェルパが殆んど出稼ぎにでかけてしまっていますので、事実上は困難です。

アイスフォール用の丸太の買付けは先日四〇本買付け、あと一〇～一五本を近日中に買付けたいと思っております。今年に入って第一次偵察に続く第二次偵察で多くの丸太を買ったため、現在下の村には全くなく、だからといって更に下の部落で買うと、ポーター賃などで高くなりますので、まだ切ってない生の丸太を四〇本買いました。これから来年の春本隊がくるまで、未だ、三ケ月以上あるので、生の丸太は充分乾いて軽くなるのではないかと思います。

次に二〇人のローカル・ポーターの予約ですが、現在未だ九名しか見付けておりません。今このシェルパの村は農閑期で若いものは殆んど村から出てカトマンズの方に働きにいってしまっており、村には老人、婦女子しかいないからです。このようなわけで、今年は元気そうなローカル・ポーターをネーム・アップするだけで、年が明けてからアドバンス・マネーを支払って確保したいと思っております。

それから最後に、一月にカトマンズにつくフランスのボンベ、ケロシン、ガソリンを購入し、本隊がつく前にペリジェへ運んでおきたいと思っています。二次偵の時に着陸失敗して破損したツイン・オッターは現在修理を終えてルクラ＝カトマンズ間に復航しております。現在最大積載量を四〇〇〇ポンドから三〇〇〇ポンドに減らし、料金は同じ三五〇ドルですが、それでもキャラバンよりも有利でしょう。

来年の春はオーストリーのローツェ隊もクーンブへ入りますので三隊がクーンブに入ることになります。その上東海支部のマカール隊が、この付近から三〇〇人のポーターを連れていく話があり、かなりポーターが不足することが考えられます。

以上気がつきましたことを書きました。こちらシェルパの正月は日本の旧暦と同じ二月です。従ってクリスマスも元日もありません。（十二月十九日付クムジュンにて、植村）

〔その二〕

十二月四日にカトマンズよりペリジェに戻ってきて越冬生活に入りました。早速気象観測器具を組み立てたり、登山中は忙がしくてできなかった機械類の整備をはじめました。

ファクシミリも無事動き出しましたが、奥深い山中であり、また谷筋でもあるため日本からの放送は仲々キャッチしにくいようです。現在の生活は毎日三時間おきの定時気象観測とあとは飯を作ったり、本を読んだりするだけで、あっという間に一日がすぎてしまいます。スキー隊の越冬隊員と交替で留守番して、時々あちこちの氷河などを調べたりしています。日の出が朝九時、日没が三時と実質労働時間は、谷筋のため六時間しかありません。日中でもこと二～三日は気温が氷点以上に昇らず、夜間などは摂氏マイナス二十度近くになることがあります。しかしこんな宝庫みたいなところにいるとあれもこれもと思っているうちに、すぐ日が経ってしまいます。本隊がくるのももうすぐのような気がします。

さて本隊の参考のために気のついたことを報告します。

● ラヂオは非常に入りにくく、ここでは約六～七mのアンテナを立てておりますが、JSBの三・九MHの日本の放送を辛じてキャッチできる程度です。

● ファクシミリはペリジェへついてから三日間の奮闘の結果、やっと動き出しました。輸送の途中の振動ではずれたパーツが二三あったようです。その結果ここで入るのは、VVD（New Delhi）、NPN（Guam）、RHB（Khabarovsk）の三つのみです。JCは音は聞えるのですが、非常に電波が弱く、また雑音も多くてとても判別できません。残念ながら新聞はあきらめました。また傾向として12MH以上の短波長は殆んど入りません。長波になるほど明瞭になります。電源はアルカリ・バッテリーの液がなくなってしまったので蒸留水を補充してやっておりますが、今のところ支障はありません。

● ジェネレーターは二次隊の装備の中で、最も好評だったものの一つでしょう。最初は電灯をつける気など全然なかったので、電球も三個しかもってきませんでしたが、本隊の時はかなり必要と思われます。それに伴いコード類もかなり必要でしょう。それからBCで機械類を並べるテントは夏天の五～六人用でよいから是非必要です。

次に本隊の時に追加して欲しい装備をあげます。

ルサフォード型最高温度計、最低温度計（三組位）、サーミスタ温度計、電子管平衡記録計（ポテンショノメーターでも可）、週巻自記温度記録計記録紙、ロビッチ日射計記録紙、アルカリ蓄電池電解液、鉛蓄電池電解液、ジェネレーター部品、小型トランシット、計算尺、理科年表（一九七〇年版）、トレーシング・ペーパー。

大体以上です。こちらは毎日することが多くて時間のたつのが非常に早くて困ります。雪はまだ全然つもらず、待望のスキーもできません。皆さまによろしく。（十二月二十一日付ペリジェにて、井上）

エベレスト登山隊行動予定

一月二十二日　先発隊田村以下五名、A・I・I機でカルカッタへ出発。
二月八日　中発隊住吉以下四名羽田発カトマンズへ出発。
二月十五日　本隊大塚登攀隊長以下三〇名、P・I・A機でカトマンズへ出発。
三月九日　後発隊、松方隊長、中島の二名日航機にてニューデリー経由カトマンズへ向け出発。
三月二十日　BC集結。
三月二十五日～五月末日、六十五日間をもってエベレスト登山を南壁ルート、東南稜ルートの両ルートより行なう。
六月一日　BC撤収。
六月十七日　カトマンズへ帰着。
六月下旬　帰国の予定。

〔現地連絡先〕
The Japanese Mount Everest Expedition 1970, P.O. Box 42 Kathmandu, Nepal

エベレスト隊報道隊員紹介

「山」二九五号で、報道班員は八～十名が参加の予定ということを予報したが、その後、毎日新聞社関係五名、NHK関係四名、計九名の隊員が正式に決定したので紹介します。

①木村勝久（39）会員番号四八二六番
毎日新聞写真部、（日大桜門山岳会員）、ヒマルチュリ、第二次エベレスト偵察に参加、写真撮影担当。

②相沢裕文（37）会員番号四三七三番
毎日新聞社運動部、（立大OB）、第一次エベレスト偵察隊参加、報道記事担当。

③佐藤　茂（32）毎日新聞社大阪社会部、（阪大OB）、第二次エベレスト偵察隊参加。報道記事担当。

④原田益夫（27）毎日新聞社写真部、（神戸外語大OB）写真撮影担当。

⑤平　顕二（37）毎日新聞社編集局、記録映画撮映担当。

⑥内藤敏男（37）NHK科学産業部テレビ・プロデューサー。

⑦野口篤太郎（37）NHK撮影部、東大パルトロカンリー隊員、第二次偵察隊に参加、テレビ映画撮影担当。

⑧堅野正三（32）NHKカメラ取材部（慶大OB）撮影担当。

⑨中川　寛（28）NHK松本放送局放送部（早大OB）ニュース報道担当。

（以上）

ホテル・エベレスト・ビュー着工

本会々員宮原巍氏を社長に設立されたヒマラヤ観光開発（本社東京）はネパール政府の協力を得て、このほどナムチェでホテル建設に着工した。客室十二室で、本年末完成の予定。

新・爺蘭土雑記 ⑤

藤島敏男

北島へ 南の島を去る日(二月三日)は晴れに晴れて、私達は午後の空便の出るまで殆んど終日、ハーミテージのホテルで、なるほどツェルマットらのマッターホルンよりも素晴らしいといわれるのも、もっともだというようなマウント・クックの仰望を、たっぷりたのしみ、氷河の上の四日間の思い出を反芻した。旅の最中に、無為に化す、こんな一日のあるのは、本当にこころよいことだ。

夕暮の山と海の上を飛んで、北島ウェリントンへ着いたのは、街にも丘にも家々にも美しく灯の入った頃だった。ここで先着の平地組と、幾日ぶりかで顔を会わせた。ホテルの部屋へ落付くと、いきなりいま階下でN・Zアルパイン・クラブのお歴々が二、三十人集ってわれわれのためにカクテル・パーティーを開いているから、顔を出せとの話だ。テル女史心入れの連絡によるものだろうが、私は疲れてもいたし、前にも書いたように言葉は不自由だし、N・Zへ人に会いに来たわけでもないからと、逃げ口上一点張りで押し通してしまった。吉田夫妻とわれわれ夫婦以外の五人は、夜半近くまで日・ニュー親善に貢献したという。まことに見上げた心がけである。

首府ウェリントンも英本国以上に英国風の町だというが、夜ついて翌朝は新らたにかりた車で北上したから何もしらない。日本大使館もある筈だが、私は戦前巴里に三年間いたとき、一度も大使館へ顔を出さなかったくらいだから、旅先きの通りがかりに、立寄る気にもならなかった。

巴里の日本大使館へ登山姿で現われて、アンナプルナの勇者エルツォークに会わしてくれと、とんでもない要求をした日本人があったそうだが(「山」二六〇号一ページ参照)、そういう連中ならば、エヴェレストの勇者ヒラリー卿に会わしてくれと、大使館へいって要求するかもしれない。

北島の方が早くひらけて部落も多いのであろう、交通量もややふえた感じだった。風物も南島よりは、人臭いようにおもわれたが、それも海ぞいの道だけで、丘陵地帯に入ると、やはり行けどもゆけども牧場といったところが多い。

トンガリロ国立公園のホテルは、シャトウ・トンガリロと称するだけあって、英本国のどこかの城館を模したものか、古めかしい外観、内部もすべてが古風な造りだった。ここに二泊して、中の日は前回テル女史達が登ったルアペフ峰(九一七五フィート)か、近くの森林渓谷でも歩こうかと考えていたが、あくる日は濃い霧に小雨さへ降り出したもので、終日、なまけものの標本化した。まだあとにマウント・エグモントがひかえているのだからと、私は別に残念ともおもわなかった。

真夏だというのにほんのり暖房のきいた広間で、仲間とおしゃべりしたり、パイプをくわえて窓外の霧の流れを眺めたり、観光団らしい一行の出入りをみたりしていれば、一日ぐらいはすぐたってしまう。先きえ先きえと追われるような旅のところどころでポッカリ穴のあいたように、こうした休日があると、旅のたのしさはまた一段と深まるのではあるまいか、こんな思いが私の胸に浮んだ。

マウント・エグモント登山 シャトウでたっぷり休養した私達は、あくる日また別れて、平地組はマオリ部落だの鐘乳洞だの見物の後、オークランドへ、山組四人は再び南下して、美しい港町ワンガヌイまで車を駆った。起伏の多い美しい丘陵地帯のドライブは、ハンドルをとった若人には快適だったにちがいない。途中で羊の大群に道を阻まれたのも、思い出のひとつである。

ロッド・サイム氏(エグモント山岳会々長、六十才を越した温厚な氏は、マウント・クックにサイム・リッジというのがあり、エグモント峰にはサイム小屋があり、N・Z登山界では大先輩のひとりであろう)に送られて、エグモント南麓ドウソン・フォール・ロッジへ着いたときは、一面の霧であった。

あくる朝(二月七日)も霧は深かったが、八時というに下からコンウェイ、ギブソンの両名が、男女の高校生を伴ってあがってきた。予報では天候好転だから、登るにきめたという。これではわれわれが二の足をふんでるわけにはいかない。八時半出発、深い林を抜け、潅木帯草本帯そして熔岩帯へと、風の強い中を霧小便にたたかれながら、三時間約千m登って、サイム小屋へ飛びこむ頃は、夏とおもえない寒さにふるえあがった。

この日私達は一時頃山頂に達して、北側から登るタラナキ山岳会の会員に、身柄を引渡されるという段どりになっていたのだが、この荒天では頂上をふんでも仕様がない。引返えそうと話し合ったが、それには北側からの連中に連絡の要がある。C君とG君はウォーキー・トーキーを抱えて、風雨の中へ出ていったが、ややしばらくしてから、顔を真赤にして戻ってきた。そとはよほどつめたいとみえる。

山麓の仲継を経て、話は通じたというので、私達はロッジへ逆戻り、C君の車でエグモントの裾を南から北へ半周して、再び深い林の中を登った。皮肉なことに山を下りたらエグモントは、みるみる内に晴れて、全容を現わした。富士山そっくりの姿である。

ノース・エグモント・シャレーで車からおりると、スキャンラン老とベーア君に迎えられ、南の人達とはここで別れた。ずいぶん世話のやける連中と思われたにちがいないが、その好意はなんといってよいか、私には適当な言葉がない。その夜は中腹のタウランギ小屋に泊ったのだが、この新しい小屋は、暖房がとおり、温水が出る、シャワーがある、寝室にはベットランプまでついている、五四〇〇フートの高さだから眺めは素晴らしい。壁間にはヒラリー卿とジョージ・ロウの写真があった。エベレストで活躍したふたりを讃える意味であろう。

会員の数は知らないが、こんな小屋を持つタラナキ山岳会は余程裕福なのだろうと、それがうらやましかった。

あくる日の朝は、すがすがしく晴れたので、今日こそはと早朝から登り出した。富士のような山だから登路は別段どうということもない。ただ紙屑や空カンがひとつも落ちていない点は、祖国の富士と少しちがっていた。小屋から約三千フィートの登りだが、半分ぐらい登った頃から、霧が捲き、やがて強風が雨を伴って吹きつけてきた。海に近く、天候の激変する山なのだろう。しかし引返すのも業腹だと、とうとう火口の雪をふみ、頂上(八二六〇フィート)までのしあがった。雨と霧と風、空々漠々、なにもみえない。晴れたならば、私が過去に登ったいくつかの、海のみえる山頂の中でも、最も壮麗な眺めを得られたであろうものを、天をうらみたいような気持であった。

(つづく)

東海支部先発隊出発 東海支部マカルー学術遠征隊の先遣隊松浦正司、後藤敏宏の二氏は一月十八日午前九時半羽田発のタイ航空機で出発した。

☆永年会員の弁☆

昭和四十四年の年次晩さん会席上で、私はJACの永年会員となり、銀を巻いた会員章を受取った。これは私にとって幸福なことであり、また嬉しいことである。二十三歳のとき入会して、五十年たった今日、至って壮健であるのは幸福というべきであろう。山のぼりがすきで入会した以上、山から離れ、山仲間からはずれ、JACからいつの間にか消えてゆく、というようなことにならずにすんだのは、嬉しいのである。

大先輩の木暮理太郎氏から「君も山岳会へ入会し給え」と言われたことはおぼえているが、紹介者は一体誰だろう。入会申込書が残っている筈もなし、所蔵の「山岳」全揃は焼亡したし、探し物の達人山崎安治君を煩わしたところ、大正八年十一月二十六日評議員会で、入会承認されたことまでは判明したが、紹介者の名はどこにも見あたらないという。いくら私が図々しくても、紹介者なしでJACへ押入るわけはない。まして弱冠二十三才、純情可憐(だった?)の若者に、そんな度胸のあろう筈もない。これは恐らく木暮さんが、紹介者氏名のところに署名もしないで「いいだろう」と、評議員会に持ち出されたに違いない。私はそう考えることにした。

それからの五十年、日本山岳会々員の一点張りで押通し、ほかの登山団体に属したことはない。学校山岳部などというものに、かかわり合いをもったことは勿論ない。乗っておりたらそれっきりの電車と、入って出たらそれっきりの学校とは、似たようなものというのが私の持論だし、たまたま入って出た学校が、当今ならば駅弁大学とでも言われるものだから、看板を出すとな

れば駅大OBとか、駅大出とかということになるわけだが、どうもあまりパッとしないから山登りの世界で何の役にも立たないそんなものを持出したり、名乗ったりしたおぼえはない。

五十年といえば、人の一生のうちで相当長い歳月である。その長いあいだに、私はJACの中で、たくさんの先輩を知り、数多い友人を得た。そうして先輩友人に、散々シゴカれ揉まれて、からだの調子は甚だよろしいが、その昔、純情可憐（？）の青年は、いまや「藤島が舌癌になれば」と、ときに言われる老年になったのである。まことに日本山岳会とは、おそろしい会であるとおもう。

永年会員は真鋳の銀巻会員章をもらうことになっているようだが、私は最初に交付された七一〇番の会員章を、失くさずにいたので、特に申出てそれに銀を巻いてもらった。これは私の所持品の内では、最もふるいもののひとつである。頭の中でいろいろと思いめぐらしてみたが、同じ大正八年に英国から取りたせたカメラが手許に残っているにすぎない。古書など刊行の年代はふるくても、私の所蔵となってから五十年を経たものは、どうもないようだ。こう考えると、この小さな会員章が私にとっては、本当に大切なもののように感じられる。

最後に、世間でよく「馬鹿のひとつ覚え」というが、山のぼりがすきでJACの会員になったものが、いくつになっても山のぼりを続けている場合には、「ひとつ覚え」にしても「馬鹿」と言われる心配はないと、私は堅く信じていることを書き添えておきたい。

（四十四年十二月記）

追記　同じ日に永年会員になられた石井鶴三さんも、七〇九番のふるい会員章に銀を巻いてもらったとのお話であった。

（藤島　敏男）

富山ヒマラヤ登山隊帰国御挨拶

昨年秋にネパール・ヒマラヤの処女峰グルジャ・ヒマール（七一九三m）を目指した「一九六九年富山ヒマラヤ登山隊」は、十一月一日にその初登頂をなしとげ同月二十日全員カトマンズリ帰着し、登山活動は無事終了いたしました。

隊荷の到着が遅れ、カトマンズで長期滞在ののち、九月二十日にようやく全隊員がポカラに集結し、翌二十一日から本隊が約七十名のポーターをつれてキャラバンを開始、最奥の村グルジカーニに同三十日に到着。そこで人夫交代のため一日滞在し、十月四日にカペ・コーラの四一〇〇m地点に本隊がB・Cを設営しました。

翌日から早速ルート偵察をはじめましたが、荷物と人夫の関係であとに残っていた隊員が合流し、全員がそろったのは十月八日のことです。それからは急ピッチで活動を展開し、同九日にカペ氷河上にCⅠ（四七五〇m）、十月十四日に支氷河の末端に仮CⅡ（五〇〇〇m）を設けました。

それから上部へのルート選択はきわめて困難なものでしたが、支氷河の雪崩と氷の崩壊の危険をさけて、支氷河の左側の岩壁にルートをとり、CⅡ（五三〇〇m）を十月十八日に建設、そして二十日にようやく急峻な岩稜から上部雪原に抜け二十二日にCⅢ（五七五〇m）を設置しました。この間には約一二〇〇mのロープが固定されました。

このCⅢからはじめてグルジャ・ヒマールの西側を眺めることができましたが、さらに上部へは深い積雪の雪田で苦しいラッセルをしいられました。CⅣ（五八〇〇m）のメドをつけたあと交代で休養をとり、十月二十六日から頂上へ向かって行動を開始、CⅢが前進ベース・キャンプとなり隊員、シェルパ全員がそこへつめました。

第一次アタック隊の金山、酒井、テンジン・ギルミはシェルパに支援されて二十七日にCⅣにはいり、二十九日にCⅤ（六四五〇m）を設け、翌三十日頂上へ向かいましたが、深いラッセルとキャンプ建設の疲労などが重なり、六九〇〇m地点に達し引き返さざるを得ませんでした。かわってこの日には第二隊の伊東、佐伯、ラクパ・テンジンがCⅤにはいり、翌日第一隊と交代しました。翌十一月一日、佐伯、ラクパ・テンジンは伊東の支援を受け、最終キャンプを早朝に出発し、第一隊のトレースをたどり、雪と氷の尾根を登りつめ、午後二時四十五分、ついにグルジヤ・ヒマールの頂上に立ちました。

その後フルスピードで撤収、下山を行ない、十一月四日には全員ベース・キャンプへ戻りました。

本登山隊の準備以来、皆さまから多大のご支援、ご援助をいただき、ありがとうございました。

一九七〇年一月、富山ヒマラヤ登山隊、隊長、薬師義美、副隊長伊東信隆、隊員酒井正明、金山清一、佐伯友邦、酒井宏征、井上晃、下中健一

南会津、三ッ岩岳

藤島　玄

古くから知られながら、交通不便で訪れる人もない阿津希温泉。今も桧枝岐、田島間をバスで行く人は、桧枝岐川の対岸二〇mの段丘に養鶏舎ような建物を見て過ぎるであろう。

会員鈴木敏雄と会津の市村、小滝会員等の一行が、地元会津南稜会の会員に迎えられて、駒止峠を越すと暮色は迫り、内川入りの車は闇を裂いて走った。湯ノ橋で電灯を見てホッとした。

熱湯が無細工の鉄管から一坪の木製の浴槽に溢れている。〝川に落下しないよう注意願います。村長〟の貼板を裸電灯で見上ると、ガラス戸の三枚は無くなって一枚だけ残り、窓の外は断崖である。紅葉だからであるまいが、鳥鍋の匂が漂うので、澄みきった湯も早々に上ると、たちまち会津地酒の盃がグルグル廻る。小豆畑があったから小豆温泉ではなく、熱い湯が出ていたからアッキノ湯であろうと地名語源説一席。それはそれとして、いま百名収容の鉄筋の建物が、隣りに降雪前に完成を急いでいた。

十月十二日　ひどく寒くて眼を覚した。座敷のガラス戸も満足なのは一枚も無しの凄さまじさ。晴れた青空より視界の九割を占める炎のような紅葉の美さに歓声をあげた。

三ッ岩岳（二〇六五m・地図桧枝岐）紅葉観賞登山のポスターどおり、バスできた花の服装の娘たちを交え五〇名を越したパーティーになった。

黒桧沢の二重滝の横に、登山道は縄梯子のようにぶら下っていた。急な電光形に踏むと、マニキュアした指の第一関節のようなドングリが無数にころがっている。三ッ岩岳頂上まで五三八五mの標示板が無いと、沼田街道のバス道路から、こんなにも簡単に取付く道も珍しい。

ナラ林の急登一五分で頂稜のヒメコマツの間を縫うと、すぐブナ林となって約一五〇〇mまで続く。

迎る尾根は単調な一本道、急登ひとつで一三〇八m付近へ出る。大きなブナ林の木肌に、明治二十五年二月二十六日大熊三十貫芳太郎から大正五年四月八日駒ガ岳参拝など無数の切付けが集中していた。思うにこの山には駒ガ岳という現在の三ッ岩岳と、三ッ岩岳という頂上より東の二〇〇〇mの岩峰の二つが同居して混乱しているらしい。ブナ林が終る約五分間は雑木の潅木帯となり、すぐツガ林となる。私にはオオシラビソであるかクロベであるか判らないが、この整然として森相の変化は、苗場山とそっくりだと語り合った。そうだとすると草原に小池のある田代も近いと思うより早く、白いものが目に入ってくる。近づくとそれは霧氷に包まれた輝きであった。針葉樹林の限界が約一七〇〇mで終り、大小の田代が斜面に張りついていた。

中田代から町村境界主稜の東側の笹を掻むと、黒桧沢源頭に臨む二つの巨岩の上部を行き、やや離れた南方に高い岩峰を仰ぐ。これが三ッ岩である。

道は三ッ岩の岩峰を左にして笹の斜面を登り、少し曲ると広い平頂に小さく聳えた頂上を見せた。

荒っぽい三ッ岩岳の頂きはハイマツと、シャクナゲと、岩と、人でこぼれるばかりである。南会津の山波は紅葉の真盛りで、身近かの樹林は霧氷に輝き、吐く息も白い。照ったり曇ったりの天気で視界は一五キロに限られたが、足下から延びる会津駒ガ岳、それに続く中門岳を正面にして、御神楽沢が延び上るシンメトリーの地形を紅葉が飾る美事さ。片方の底に奥只見ダム。片方の空に帝釈山、見える山より見えるはずで見えない山が多かった。

温泉から緩登四時間半。最初は風化した花崗岩、間もなく火成岩となったが、踏む道はしっとりした土道で、花はツルリンドウだけ。ワタスゲもハクサンコザクラも枯れ、コケモモの実はあったが、ゴゼンタチバナの紅い実のさっぱりないのが気になった。

（四四・一〇・三〇）

69年国際アルピニスト集会

望月晃

'69年シャモニで、二年に一度開かれる国際アルピニスト集会に、幸運にも日本山岳会代表として松島利夫会員（RCCⅡ・MCC代表）と共に参加することが出来たのでその概要を報告いたします。

七月七日。今日は国際アルピニスト集会の開会日である。いつもは、外国人の出入りが少ないこの学校も、朝から世界中のアルピニスト達でにぎわっている。われわれが校門をくぐると、突然『ボン・ジュール・カミカゼ』と陽気なフランス人から声がかかった。午後四時、コンサートホールを思わせる会場で開会式が行なわれる。巨大の世界地図を正面に、役員が並び、向かい合ってわれわれ五〇名が着席する。まず参加国と出席者の確認点呼が行なわれた。すでに有名なベテラン諸氏を始め、ヒマラヤ、アンデス等で活躍しているこのメンバー達に、自分の存在を疑い確めたのを覚えている。登山学校長ジャン・フランコ代表の挨拶、来賓の祝辞がのべられ、再び校長から、本大会における諸注意事項（山行届・ケーブル・山小屋・食券等）が述べられ、ついで役員のコンタミヌ氏、バイヨ氏、ホリビロ氏の紹介が行なわれた。彼らはENSAを代表する教官で、ジャヌー、ムスタグタワー等のヒマラヤ遠征の英雄である。最後に美しいマドモアゼルから集会資料、参加者名簿、食券等が手渡されたので、おごそかだった雰囲気は一変し、なごやかな空気が流れた。

第一週。モンブランは雲におおわれ、積雪が続いた。最初はアイゼン・ワークと岩登りの練習を、全員でボゾン氷河とガイヤンの岩場で行なった。次に天候は不安定であったが、ベルギー人、インドのエベレスター、ラワット氏と共に、冬の前穂北尾根に似た凹凸の激しいエギュー・デ・ミディのコスミック稜を登攀。その後十四カ国の国際パーティーでモンブランへ行ったが、不運にも新雪混りの嵐になってしまったので、下山を余儀なくされた。

第二週。好天の兆が見えた七月十五日、シャモニは、山岳兵のフェスティバルでにぎわった。

数日後、指導教官の厳重な注告を受け、私達はシャルモ北壁直下にあるメール・ド・グラス氷河に荒く削られたモレーンの丘の上にいた。夕陽は向かいのドリューを呪うかのように赤く染めた。午後十一時、気温五度、標高二五〇〇mにしては暖か過ぎる。ビバークサイトは、そのまま不気味に時間が過ぎて行った。夜明け前、一瞬凄まじい豪音を伴い、シャルモ北壁に雪崩が発生。天地をゆるがす響きは、しばらく余韻を残し、今度はシャルモ氷河の崩壊を誘い、薄暗いあたり一面は地獄の様相と化した。早朝、バイヨ氏の忠告通り、早々に下山した。

第三週。七月の最盛期を迎え、国際観光地にふさわしい、絶好の天候に恵まれ、針峰群の雪は消え、黒々としたその勇姿は、まるで天を刺さんばかりである。われわれのコンデションも好調に仕上り、いよいよ大岩壁のツアーに出かける時が来た。

快晴のメール・ド・グラスをさかのぼり、岩の△極度に困難な▽コースとして有名な、エギュー・デ・モアヌの東壁に、ギリシャ人を混えて出かけた。一九二五年コンタミヌ氏初登の後、ラシュナル、テレイの名コンビを生み、鉄人ブールが、圧倒的な速さで登ったという伝説を秘めた壁である。周囲を氷の山で囲まれたクーベルクの山小屋でNHKの取材を受けた。翌日、スバルタの戦士を思わすハイトール氏とザイルを結ぶ。苦戦を覚悟した。この五〇〇mの鋭い花崗岩の壁も、軽快なフリー・クライミングと、多少の人工登攀を加え、すっかり気持が通じ合う彼と、両国の美人観に苦笑しながら、八時間で登り切った。

最後の山行は、アルプス六大岩壁と呼ばれるドリュー北壁に、われわれ二名と、二日前ジョラスを片ずけた木村、友田両氏（後にアイガー完登）を加え万全を期した。シャモニからアルジェンテールのケーブルで取付点に向かう。ここからの北壁は、益々巨大で、まるでのしかかるように威圧する。

七月二十一日夜明け前、大きく口を開けたベルグ・シュルンドから、アタックを開始した。まず完全にクラストしたクーロアール約二〇〇mを突破、いよいよ寒さも厳しさを増し、朝陽がモンブランを輝やかし始めた。クーロアールの次は、やや傾斜の緩くなった雪壁になり、高度を稼ぐ。湿っぽい岩壁部分は、ベルグラに被われ、北壁登攀の厳しさを迎えた。氷のつまった、クラック・ジュードルに、クサビやピトンを打ち込み、有名なランベール・クラックを登る。次のピッチに、極度に難しい岩の割れ目に入り込み、ルートをはずしてしまった。そして、登攀中つきまとう危険な黒雲や、不意を襲う落石におびえながら、凍りついたホールド、スタンスにたえず緊張させられた。夕刻、やっと四人が座れるほどのバルコニーに体を領けた。狭いテラスのビバークは、本当に幸いものである。四人は重なるようにして、長い夜を越す。幻想的な月は、雪と岩の王国を、ファンタシックにかもし出す。翌日も、この壁にルートを求めて、次第に狭くなって来たドリューを登り続け、ついに北壁を登った。午後四時三十分であった。水晶が並ぶテラスでもう一夜を過した。そして二十三日、アポロのニュースで湧き立つ、シャモニのステーションに全員無事着陸した。（集会中、ドリューの北壁はわれわれ一隊の記録にとどまった。）

七月二十六日。集会最終日、午後六時、三週間いつも、安らぎと空腹を満たしてくれた食堂で、閉会式を兼ねたカクテル・パーティーが開かれた。益々日焼した皆の顔、異様に輝くその眼は、喜びにあふれている。「プロースト」、乾杯である。実は、机上のワインにしびれをきらしたドイツ人の音頭であった。皆も遠慮なく大いに騒ぎ飲み出した。アンナプルナ初登者モーリス・エルゾーグ氏から祝辞が述べられると、今大会のクライマックスを迎え、場内は割れんばかりの拍手で熱気の渦と化した。集会中の山行記録が渡され、今まで飲むのに夢中だった参加者は、息を飲んでこれにくい入り、眼を輝かせながら、互いにサインを求めたり、各ルートの武勇伝に花を咲かせ、一時はシンと静まった会場も、また爆発的な歓喜に湧いた。ちょうど、ラワット、ジョシ両インド人と握手をしていると、世界中の山男達から『トシオ、アキラ、サミット・オブ・エベレスト！』と盛んに激励の声援をうけた。どうも日本山岳会のエベレスト遠征に、私達が参加するものと決め込んで次々に酒をついでくれる。しばらくして、役員諸氏の挨拶があった。コンタミヌ氏から『今回の集会記録は、今までにない、優秀なものであった』とほめられ、最後にフランコ氏から閉会の辞がのべられた。

こうして楽しかった国際アルピニスト集会は、幕を閉じたのである。

この期間にわれわれの登った記録は次の四つである。

一、七月七日（曇）
エギュー・デ・ミディー（三八四二m）コスミック稜（ノーマル・ルート）
○ベルギー人、Jean Bourgeois, 望月

二、七月十一日（曇）
エギュー・デ・グーテ（三八一七m）のノーマル・ルート
○十三ヵ国、二十五名参加（松島望月を含む）

三、七月十八日（晴）
エギュー・デ・モアヌ（三四一二m）東壁、コンタミヌ・ルート
○ギリシャ人、Dimitrt Haiiogi-ou、望月

四、七月二十三日（晴）
ブチ・ドリュ（三七三三m）北壁、オリジナル・ルート
○松島利夫、木村憲司、友田、望月晃各国のエキスパート達は、
○グランド・ジョラス北壁（七隊）
○ドロワット北壁（三隊）
○モンブラン・フレネイ壁（三隊）、ブレンバ壁（六隊）、トリレオ北壁（三隊）等々全く豪快な登攀記録を残した。

なお、私は大会終了後、ギリシャ代表とペアでモアヌ東壁を登攀記念として、ギリシャ山岳会の招待を受け、エーゲ海を見おろす、デルフィー山（一七五二m）の六級ルートの開拓に参加。更にギリシャ山岳会恒例のアルプス山行のガイド兼コーチ（オーストリア・ホッホゲビルグ登山学校指導員を見込まれ？）を任され、再びモンブランのレム峰、ペイユ峰に登る幸運に恵まれたことを付記しておきます。最後になりましたが、私にこのようなチャンスを与えていただいた日本山岳会の御配慮に対し心から御礼申し上げる。

日本の山の印象記

これは日本に滞在しているアメリカ人からみた、シエラ・クラブのメンバー本会入会、シエラ・クラブの第三グループに同行、北アルプス、穂高岳、槍ヶ岳、剣人登り、彼等の自然保護思想に立山にふれ、その記事は、われわれに興味あるものと思われます。

前号のキンボール博士の記事とともに日本語に翻訳して掲載するように編集者に求められましたが原文のもつニュアンスが損われるおそれがありますので、あえて英文のまま掲載することにしました。

（関口　周也）

The Sierra Club in Japan– A Subjective Profile

John G. Day

Several years ago, she had been paralyzed by vertigo while climbing over some Roman ruins at Baalbek in Lebanon. on the third day out of Tokyo, the necessity to use a chain anchored in rock while climbing from Hodaka-dake -sanso to the summit of Oku-Hodaka required several minutes patient but informed coaching by our two volunteer Japan Alpine Club guides, Mr. Shuya Sekiguchi and Mr. Eishiro Horikawa. Later the same week in a party expertly led by another JAC volunteer, Mr. Takeo Yoshino, the young nurse from San Francisco was able to successfully negotiate a slippery, mist shroaded "Kani no Yonobai" and "chimney" to reach the top of Mt. Tsurugi. Her personal victory over an irrational fear undoubtedly proved but one of many rewarding self discoveries experienced by members of Sierra Club this summer.

I had joined section B of the Third Sierra Club group led by Dr. Stewart Kimball for the Alpine Section of their six week trip. Journeying initially with four other members of the Tokyo JAC chapter, we traveled to Matsumoto by train, then by bus to Kamikochi, and on foot to Karasawa, Hodaka, and Yari. The 19 members in Section "A" led by Peter Overmire had opted for a physically less taxing excursion to the area around Nikko and they rejoined our party at Hida Takayama where we enjoyed a full day and two evenings visiting the float museum, reconstructed mountain village and other interesting cultural landmarks as well as local antique shops, pottery kilns, restaurants, and bars. From there we continued to Toyama and the North Alps under the able assistance of Bunji Hamada, volunteers from the Toyama chapter of the JAC. On returned to Toyama, the Sierra Club members continued to Kanazawa and I returned to my job in Tokyo, -sunburned, relaxed and with a deeper appreciation for some of my fellow Americans as well as my Japanese hosts.

The Sierra Club members I met certainly were not typical of a very broad cross section of the American population. In composition the group (which it must be remembered was the only one of the five I came in contact with) was predominantly affluent-middle and upper middle class, white, well educated, well traveled, and older on the average than I had expected. Almost all had prior contact with Japanese in the U.S. and without exception has examined various aspects of Japanese history, culture, geography and language before their departure. Yet the individual attitudes exhibited by the group's members reflected some of the best qualities of the American character. They were 40 strong willed, intellectually stimulating and curious personalities with an exceptionally wide range of individual background and interests.

Our leader, one of four medical doctors in the group, had visited Japan in 1968 to suervey and develop the present itinerary. With his attractive wife Betty (a far abler, warmer "down to earth" representative abroad for "the nature California woman" than any Hollywood could ever develop) he would be returning at the end of the trip to personally vat 60 gallons of wine from his own vineyards. His sub-leader, Pete Overmire, had joined the Japanese group following a six week survey trip to the Hindu Kush Mountains of Afghanistan where he will lead a Sierra Club group next summer. A computer specialist and Vice President of a major California Bank, this trip provided Pete with a better exposure to Japan (from Mt. Rsusu to Mt. Aso) than most businessmen who have visited Tokyo 15 or 20 times. While there isn't space here to detail the backgrounds of the other Sierra Club members, they included an abstract expressionist painter and his wife, a Christmas tree farmer from Illinois who joined the group after several weeks touring New Guinea, several retired businessmen, a former woman journalist who had covered prewar China, a couple of newly weds, an amatuer marine biologist, and a 76 year old lady Nevada rancher.

Above all each was and is an enthusiastic outdoorsman and a dedicated conservationist. One exchange stands out most vividly in my memory. The first morning at Berghaus near Mt. Tateyama a television reporter who was covering the group for a local Toyama News Program News Program interviewed Dr. Kimball through our JTB coordinator. He asked if the increased number of foreigners visiting the mountains and natural parks of Japan might represent a problem because of the resulting commercial exploitation of these wild areas. Dr. Kimball quietly reviewed the history of the Sierra Club, one of the most active and influential cnservation organizations in the United States and one whose "no compromise" stand on the preservation of wilderness, scenic, and recreation areas had lost the club its tax exempt status when the U.S. De-partment of Internal Revenue in a highly controversial, still contested action had reclassified the club as a lobby. More importantly Dr. Kimball reviewed some of the Sierra Club's many education programs which aim at educating Americans generally against littering and instruct all campers, hikers and other users of public land to backpack or carry out any foreign material they carry in. The rest of us nodded our agreement because for several days we had been hiking and climbing through magnificent scenic areas but over trails covered with discarded bottles, tin cans, paper and other trash thoughtlessly thrown there by our Japanese caunterparts. Certainly we had been impressed with the large number of Japanese enjoying these same mountain areas and the really exceptional mountain huts, schools,and other facilities provided for them. Also the hut owners and guides whose hospitality and assistance we sincerely appreciated, represent a positive force for conservation education and control. Men like Jutaro and Hideo Imada, Sadao Hokari, and many others especially impressed us with their knowledge and dedication. But if I may be

permitted to expand on Dr. Kimball's reply to his television interviewer, it's my strongly held opinion that foreign individuals and groups such as the Sierra Club do not represent any danger to the scenic beauty of Japan's natural areas. If the few hundred visitors this summer were to expand to a few thousand they might act as a positive influence or catalyst on the conscience of Japanese hikers to exercise more care in disposing of the trash which they now leave to despoil many of these natural areas. In this respect the JAC provides a most essential link. Just as I hate to think of foreign visitors seeing only New York or Chicago and considering these cities totally representative of Amercan life so I should think the other members of the Japan Alpine Club will want to continue assisting foreign visitors to see more of Japan than just Tokyo or Osaka.

While rooted in immediate nationalconcerns both the JAC and the Sierra Club are international in the scope of their programs. I only hope that contacts such as the ones this summer will increase, allowing both these great organizations to continue and expand their world leadership in fighting to preserve the quality of the human environment.

会報原稿募集 会報は会員皆さんのものです。紀行、随想、研究、書評などふるって御寄稿下さい。

図書紹介

わが雪と氷の回想

加納一郎著

山岳会の長老がたには小がらなかたが多い。藤島（敏）さんも、槙さんも三田さんも、佐藤（久）さんもみな小がらな方々である。藤木九三さんもそうだし、吉沢一郎さんもそうである。著者のお名前は学生時代から存じ上げていたが、お目にかかったのは数年前の四月の会員総会のときであった。言葉はかわさなかったが、遠くから話されている加納さんも、やはり小がらな方であった。ちょうど世界一周から帰られたばかりで、たしか松方さんに指命されてその報告を簡単に述べられたと記憶しているが、その北極の旅の紀行と、雪氷遍歴と題する随想をまとめられたのが今回の本である。

この北極の旅の発端は、著者の知己知人が、古希の記念として、著者が長年筆にしてきた極地を実際に見てくるようにとりはかってくれたというまことに心暖まる思いやりから出たものであった。あこがれの極地を空から眺めた感慨を著者はこう書いている。

「もうこれまで写真では何百枚、何千枚と見てきた極地氷原の景観が、今やなまなましく、いきいきとわたしの目のまえにくりひろげられるのだ。——はじめのうちは息をつめて、見おろしながら感慨にふける。こうした氷のなかに身を投げ出して戦ったアムンゼン、バード、スコット、ウイルソン、ウイルキンス、アイエルソンとかぎりなく思い浮ぶ探検家の顔とその高壮苦闘の状景」

各地で若い知人たちに歓待されながらアンカレジからSASで北極をひとまたぎにコペンハーゲンに飛びオスロではナンセンのフラム号をつぶさに見物、ロンドンではACを訪ねたのち、世界の探検家の総本山RGSを訪問した。探検の総本山にお参りにきたのだと著者はいっている。ACのルームの模様はいろいろ耳にし、目にもしているが、RGSのルームについて述べられたものは小生もあまり知らない。著者はこれについてこまごまと報告している。回想の泉は、胸にあふれてつきるところがないと述べている著者の胸中がさっしられる。テムズ河につながれているスコット探検隊のデスカバリー号も訪れ悲壮な最後をとげたオーツ大尉をしのんだ。

インドからネパールに飛び、カトマンズとポカラで、ヒマラヤの峰々を仰いで羽田に帰ってきた。「札幌にかえってほどなく、一夕もっとも親しい友人が集って無事帰国を祝ってくれたがふと気がつくと、いずれもわたしよりはるかにお若いにもかかわらず、わたしよりもずっと豊かな在外経験者であった」と最後に著者はしるしている。

まことに心なごむ書物であり、また著者の極地に関するがいはくな知識が現地での見聞によって、さらにビビッドに展開されており、著者のこれまでの業績を物語っている。（山崎　安治）

昭和四十四年八月三十日朝日新聞社発行、二七一ページ、写真多数。定価五八〇円。

図書室便り

（昭44・12）

新刊図書受入報告

二見書房寄贈

(1)日高信六郎著『朝の山　残照の山』昭44

深田久弥氏寄贈

(1)深田久弥著『雪白き山』昭44　二見書房刊

冠松次郎氏寄贈

(1)冠松次郎著『山渓記』第四巻、第五巻　昭44　春秋社刊

あかね書房寄贈

(1)マリオ・ファンティン著牧野文子訳『ヒマラヤ巨峰初登頂記』昭44

(2)『大島亮吉全集—第一巻　紀行—』昭44

定期刊行物受入報告

〔部報・会報類〕

(1)『兵庫山岳』No. 31 (44—12)
(2)『国立公園』No. 247 (44—12)
(3)『京都山岳』No. 535 (44—12)
(4)『新潟県山岳協会会報』No. 4 (44—10)
(5)『OMCLレポート』No. 239,240 (44—10,11)
(6)『山岳手帳』'70 (44—11)
(7)『自然保護』No. 89 (44—10)
(8)『THAKTO』No. 7 (44—10)
(9)『登歩渓流会会報』No. 9/10/11
(10)『東海文部報』No. 7 (44—11)
(11)『特別事業報告　海外登山技術研究会報告』（昭和43年度　(2)
(12)『山と雪』No. 139,140 (44—11,12)
(13)『北海道自然保護協会会誌』No. 6 (44—12)

〔雑誌〕

(1)『アルプ』No. 142 (44—12)
(2)『岳人』No. 271 (45—1)
(3)『HIKER』No. 171 (45—1)
(4)『山と渓谷』No. 376 (45—1)

〔その他〕

(1)日本大学三島高校山岳部OB会『カナダ・キングピーク登山報告書　'69』（大久保孝則氏寄贈）
(2)愛知教育大学山岳会『バウダピーク登山計画書　'71』
(3)札幌医科大学山岳部『第一次ヒンズー・クシュ遠征隊報告書　'67』
(4)法政大学山岳部『プニ・ゾム登山報告書　'68』
(5)中野市体育協会　中華民国台湾省玉山親善登山隊『中華民国台湾省玉山親善登山記　'69』（丸山精一氏寄贈）

洋書受入報告

松田雄一氏寄贈

1. F. Younghusband "The Epic of Mount Everest" -School Edition-, 鱒魚書房, 昭和13

工楽英司氏寄贈

1. Jean Escarra and others "L'Expedition Francaise l'Himalaya 1936", Paris, 1937.

Journals Arrived in December 1969

1. "Alpinismus" Jahrgang 7, 11. November 1969.
2. "Die Alpen" Jahrgang 45, 11. November 1969.
3. "The American Alpine Journal" Vol. 16, No. 2. 1969.
4. "Der Bergsteiger" Jahrgang 36, Heft 11. November 1969.
5. "Österreichischen Alpenvereins. Mitteilungen" Jahrgang 24, Heft 9/10. Sept./Okt. 1969.
6. "Österreichische Alpenzeitung" Jahrgang 87, Folge 13 67. Sept./Okt. 1969.

P・S (No. 7)

年もあけて、エベレストの隊員発表もあり、このところ四階の方は熱気でむんむんしている一方、五階のルームはガランとしています。先日、沖縄へ行ってきましたが、当地は実に日中二十四、五度という暖かさで、一時にぽんやりしてしまいました。沖縄の一番高い山は与那覇岳（四七八m）です。W・Vのほうでは入った人たちはたくさんいるようですが、やっぱり太陽光線で微妙に変化する海が見所でしょう。黒い鮫、巨大なB52を見る機会も得ました。ちなみに、琉球大学には山岳部はないということです。（東）

会務報告

十二月緊急理事評議員会

（27日午後2時・本会ルーム）

▽出席者　三田会長、松方エベレスト隊長、深田副会長、飯野、山崎、野上川上、大塚、松田、藤田、小倉、村木辰沼各理事、金坂、沼倉、石原、島田織内各評議員、堀田監事

▽議事

・エベレスト隊員決定の件　（松方）

登攀隊長大塚博美、隊員松田雄一、藤田佳宏、松浦輝夫、田村宏明、平林克敏、中島寛、小西政継、平野真市、長田正行、渡辺節子、土肥正毅、河野長、錦織英夫、神崎忠男、加納厳、成田潔思、植村直己、鹿野勝彦、吉川昭、神山義明、安藤千年、瑳峨野宏、井上治郎、伊藤礼造、〔科学班〕住吉仙也、中島道郎、広谷光一郎、大森薫雄。以上松方隊長を含め三十名を正式決定。一月三日記者発表をする。

・エベレスト登山募金の件　（飯野）

一月理事評議員会

（8日7時・本会ルーム）

▽出席者　吉沢、深田副会長、飯野、山崎、広谷、野上、小倉、長尾、浜野川上、大塚、辰沼各理事、金坂、石原、沼倉、藤井各評議員

▽議事

・四十五年度役員の件　（飯野）

会長、副会長、常務理事会に一任とする。

・四十五年度予算の件　（飯野）

前年度より一割増程度になる。

・エレベスト登山に関する件（大塚）

一月三日記者発表し、四日全員顔合わせをし必要事項を打ち合わせた。一月十、十一日富士山で酸素、特殊テントウインチなどのテストをする。先発五名は一月二十二日、本隊は二月十五日出発の予定。二月十日立食形式の歓送会をする予定。

▽報告

・二月十二、三日ごろ外人登山家との交歓会をプレスクラブで開く予定　（大塚）

・カフカズ招待登山の件　（吉沢）

学生部を主体として話を進める。

・ヒンズークシュ会議の件　（吉沢）

三月上旬磐梯山国民休暇村で関係者を集め開催する。

第十回登山技術講習会

指導研究委員会

▽場所　富士山お庭小屋

▽期日　昭和四四年十二月五日～八日

▽本部　チーフリーダー　山崎安治

ドクター　岡部紀正

マネジャー　関口周也

堀川英司郎

▽技術コーチ　広谷光一郎、芳野赳夫、小沢明夫、吉田宏明、中村進、宇田川允敏、中島宏、村井葵、清水孝司、降旗孟

▽受講生

坂斎篤政、大島良三、平出直人、真館修一郎、鈴木茂、飯島文雄、今井文彰、北正之、山崎芳弘、中田晴紀子、斎藤敏男、菊地哲、岡部正敏、兼子耕二、渡辺雅夫、越川昌子、吉野正浩、高井美子、庄司政子、長島和子、西山節子、武原喜男、宮崎喜人、長沢誠、須浪敏行、田中和幸、衛藤雄二、大田黒幹夫、中川広三郎

▽行動記録

十一月二十六日、本会ルームにおいて、机上講習会をかねて、準備会を行ない、パーティー編成を行なう。

十二月五日、バス会社より、富士山有料道路が、夜間、路面凍結のため、通行禁止との連絡に、急遽、出発を見合せ、関係者打ち合せの結果、山岳会ルームに仮泊することになり、出発は翌朝に延期された。

十二月六日、午前六時、本会ルーム前よりバスにて出発、中央高速道を経由して、九時過ぎには快晴に恵まれた富士山五合目に到着、思わぬことから都内での仮泊を余儀なくされた一行も、富士の寒気に身を引きしめて、御庭山荘入り、直ちにベースハウスを開設する。十二時から白草流し七合目付近まで登り雪上歩行、耐風、カッティング、滑落停止などの基礎技術を練習し、十六時、山荘に戻る。

十二月七日、貴重な第二日目は雨になってしまった。朝食後のコーチ二名による雨中偵察も空しく、山崎チーフの判断で実技訓練は中止、午前中は山荘内で、ザイルの結束法を講習、各班毎に練習をする。午後は、芳野コーチによる気象と積雪の雪崩に関する講義、岡部ドクターによる医薬品の知識、つづいて山岳会ならではの、村井、中村両コーチから海外登山の話を聞き、最後は、山崎チーフリーダーの富士登山にまつわる昔話でしめくくり、夜はコーチも、受講生も一緒になって、歌と笑いのひと時に停滞の日ではあったが、楽しく、有意義に過した。

十二月八日白草流しの急斜面を利用してアイゼンによる登下降を、サーキット法にて反復練習の後、ザイル操作による制動確保を型通り練習し、十二時山荘に戻り、十四時二十分、出迎えのバスで東名高速道を経由、東京へ向う。車中では特に、受講生全員に発言を求め感想を聞き、山崎チーフリーダーが、これに答えられた。貴重な一日を停滞したため、実技面では充実感に欠けたとする反面、六回も参加した中では今回が最も、有意義であったとする発言にいささか面目を保ったが、ともあれ、全国的規模になった講習会に対する参加者の関心は、講習会のあり方と運営について、検討すべき時機にあることを示唆しているように思われた。おわりに、この登山技術講習会を第一回より欠かさず担当してこられた山崎委員長の真摯な御努力に心からの敬意を表したいと思う。

（文責・堀川英司郎）

梶本徳次郎氏逝く

梶本さんに誘われて急にヒマラヤへ旅立ったのは十月三日だった。われわれの計画はアンナプルナの内院に入り付近を偵察するのが目的であった。

十六日にポカラに到着、翌日より行動をはじめ、ゴラパニの峠を越えカリガンタキの本流をダナで渡り、ニルギリ南尾根の最末端より取り付いた。初めは草付きの急斜面であったが三〇〇〇mを越すころより岩場を交え三七〇〇m付近では雪も降り出し、初冬の穂高縦走のような登りで、ポーターの凍傷と、スリップを用心して、フィックスド・ロープを使用した。四二五六mの岩峰を越え少し下るとトロブキだ。標高四一〇〇m、北はニルギリに続き、東はアンナプルナI峰が眼前で雪煙をあげ、西はダウラギリ主峰がカリガンダキをへだてて、立派な姿を見せたすばらしい展望のキャンプだ。このテントが五日後梶本さん最後の場所になるとはとても思えなかった。

予定を変更してニルギリに試登するため、二十六日はテントを四四三〇mに出す。二十七日は午後一時ごろより強い吹雪、四七二〇mの地点でツエルトにはいる。天候はしだいに悪くなり、ビバークする。最低気温マイナス二十度だった。二十八日は天候も回復し、ニルギリ南尾根の岩峰四八五〇mに新雪を踏んで登り、CIまで下る。二十九日テントを撤収して午後二時ごろトロブキのB・Cに帰る。

六時ごろ夕食も普通に終わり、相当疲労していたためか、彼は珍しく日記もつけずに七時ごろに就寝した。九時ごろに変ないびきに気付き、ゆり起すと「気持が悪い」と少量の不消化物を吐した。しばらくして「首が痛い」といったので首をもんでやると楽になったのか、「静かに寝かせてほしい」というので横にならせる。

とまた「枕を高くしてほしい」という。高くすると「具合が良くなった」と静かな寝息をたてた。これが梶本さんの最後の言葉であった。そのうち急に様子が変わり、何も苦痛も訴えず、そばで見守る私らにも気づかぬほど安らかに永眠された。

この僅かの間に急死される原因は何も考えられず、しいて求めればビバークによる過労と睡眠不足か。私らはなすすべもなく茫然として友の名を呼び遺体をゆすぶり続けて何時間かがすぎた。

日本大使館のお世話で遺体はカトマンズまでヘリコプターで運ばれ、スワヤンブナート寺院で大使館の方や在留邦人の人たちにより、手厚く葬儀が行なわれた。遺骨は空路伊丹に帰り、十一月十七日大阪大融寺で盛大な告別式があげられた。

会員の皆さまをはじめ、多数の方々のご会葬をいただき、ご鄭重なご弔慰とご供物を賜わったことを深く御礼申し上げます。

（前田武治）

会費納入のお願い　本年度会費未納の方は至急御送金お願いします。東京、千葉、埼玉、神奈川在住者三千円。地方二千五百円。

ルーム日誌（44年12月）

1日（月）農大懇親会
4日（木）定例理事評議員会
5日（金）第二回支部長会議
四十四年度年次晩餐会（マッヤサロン）
12日（金）ネパール語講習会、日ネ協会
13日（土）学生部女子部例会
15日（月）婦人懇談会
18日（木）エベレスト登山募金委員会
19日（金）ネパール語講習会、日ネ協会
23日（火）忘年会
25日（木）エベレスト登山募金委員会
26日（金）常務理事会
27日（土）臨時理事評議員会
年末30日31日休館
十二月中来室者三九三名

第二五七回小集会報告・忘年会

恒例の忘年会が十二月二十三日夜ルームで行なわれた。エベレスト第二次偵察隊の報告会の翌日だったため参加者が少く三十名だったが、勝田房治氏の手品、藤井運平氏、山口節子さんの歌などきかせて頂き、交換プレゼントで傑作なものがあって爆笑の連続、最後にあかりを消して蛍の光を皆で歌って散会した。ささやかな会ではあったがまとまった愉しい集りであった。

（集会・婦人懇談会委員・斎藤桂）

あとがき　この号がお手もとにとどくころはもうエベレスト本隊が出発したと思います。成功を祈るのみです。会報への御寄稿は必ず原稿用紙へ縦書で楷書でお願いいたします。（山崎）

昭和四十五年二月十日発行
東京都千代田区神田錦町三―二三　向井ビル
発行所　社団法人　日本山岳会
編集代表　山崎安治
（293）七四四一
振替口座東京四八二九番
東京都港区赤坂一丁目三番六号
印刷所　株式会社　技報堂

「山岳」広告のお願い

「山岳」第六十四号は本年度刊行を目標に編集をすすめています。御高承の如く、巻末に広告を掲載しておりますが、この広告は「山岳」出版のための大きな財源でもあります。皆様により広告先の御紹介をいただきたくお願い申上げる次第です。お心あたりのございます方は事務局までお知らせ下さい。

▽広告料金（印刷黒一色）

普通1頁（縦12.5×幅18.0糎）	¥一五、〇〇〇
〃 1/2頁（縦12.5×幅9.0糎）	¥八、〇〇〇
〃 1/3頁（縦12.5×幅6.0糎）	¥六、〇〇〇
英文見返1頁	¥二五、〇〇〇
奥付見返1頁	¥二五、〇〇〇
裏表紙見返1頁	¥三〇、〇〇〇

（以上）

「山岳」編集委員会

☆会報製本御引受け☆
製本代　（201号～250号）金600円也
送料　別受け　金120円也
中林製本手帳株式会社
東京店・文京区水道2～15，電話（943）0311（代表）
大阪店・都島区相生町7，電話（352）3491（代表）
名古屋店・昭和区雪見町1～15，電話（731）7331（代表）
工場：大阪工場（堺市），東京工場（戸田町）
▶背文字その他については往復はがきで
日本山岳会内「会報委員会」に御相談下さい◀

山岳保険に入りましょう!!
●貯蓄にもなります。
●万一の場合にはひとの迷惑を軽減します。
御相談は　日本団体生命　へ
角筈支部（専門取扱営業所）
東京都新宿区角筈1の844　新光ビル内
電話（352）1556・1557

あかね書房

山のPR誌「アルピニスト」8号出来（誌代無料・〒25・一年分百円）
101 東京都千代田区西神田3－2－1／振替東京64150

決定版 大島亮吉全集 全5巻

編集＝安川茂雄・本郷常幸
協力＝登高会

不世出のクライマーとして日本登山史上に不滅の光芒を放ち、若くして穂高北尾根に逝った大島亮吉の全著作をあますなく網羅した、全岳人待望の決定版である！

1 紀行
＝好評発売中＝
狭山の丘の一日／東北朝日岳に登り黒俣沢を下る／白馬岳スキー登山及び乙見山峠越え／三頭山／石狩岳より石狩川に沿うて／関温泉スキー講習日記／三月の槍ヶ岳／五月の立山／北海道の夏の山／荒船と神津牧場付近／小倉山／谷川岳・茂倉岳・笹穴川上流／（解説）ほか

2 随想・詩・訳詩・訳章・書簡
＝好評発売中・最新刊＝
山上所観／私が板倉から享けしものは／登高会のこと／エミール・ジャヴェルに／さまよい歩きて／日没／冬の森／山が語りしことは／アルピニズムス／二人者／単独行／山上の花園／老登山者の回想／灰色の恐怖／（解説）ほか

（以下続刊）
3 先蹤者（全）
モンテ・ローザの初登頂／ジョン・ボール／ウィリアム・マシュウズ／マンマリイ／ウィンパー／ジャヴェル／登山史上の黄金時代／黄金時代の英国登山者、ほか。

4 研究・論叢 他
冬期登山とスキー登山の定義／雪崩について／山への想片／冬雪崩／ベルクシュタイガーの日記／アルプスの山名について／峠について／スノー・クラフト、ほか。

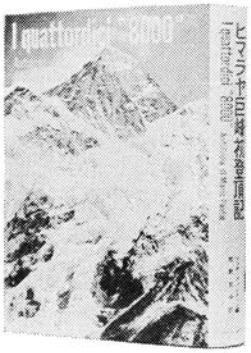
5 大島亮吉研究 他
記念として（豊部国臣）／追悼書簡（鹿子木員信）／大島君を憶う（伊藤秀五郎）／大島亮吉の人間（諏訪多栄蔵ほか）／評伝（安川茂雄）／年譜・文献ほか多数。

＊四六判箱入上製・口絵つき＝各価八五〇円（3巻のみ一二〇〇円）

ヒマラヤ巨峰初登頂記
—八〇〇〇メートル峰一四座—
M・ファンティン編／牧野文子訳

地上に八千mを越える山は全部で一四。その一つ一つについて、登攀史、初登頂記、人物紹介を貴重な写真、地図を入れて詳述している。研究家、山を愛する人々にとって待望の座右書である。
（菊判豪華装・アート口絵32頁つき・価一八〇〇円）

好評の新刊



近代日本登山史
安川茂雄 ●朝日新聞評 明治以後の近代登山の発展を説き、戦後の海外遠征ブームまでを収めている。著者が直接に体験、見聞した戦後の時期については、さすがに生きた発言がみられる。（菊判豪華装・価一六〇〇円）

山と雪に生きる
佐伯富男 ●サンケイ新聞評 経験した山のこと、南極のことが豊富に集めてある。第三部は、パタゴニアの遠征記である。山を生きぬいてきた著者の男らしい肌合をたっぷり感じとることができる。（四六判・価四八〇円）

わが青春の山々
—ガストン・レビュファと共に—
B・ピエール 近藤 等訳 （六八〇円）

遙かなるヒマラヤ
—わがネパール踏査行—
薬師義美著 （九五〇円）